

被爆者の方が「今」を生きる私に伝えたかったこと

新潟明訓中学校 賀田 琥祐

平和学習に行く前、私は父から「曾祖父が戦争へいき、大きなけがをして帰ってきた」という話を聞いたことがありました。しかし、曾祖父は「死んでしまった仲間たちに申し訳ない」という想いから、戦争当時のことを全く話さなかったそうです。もし、曾祖父が生きて帰って来なかったら、私は今この世に存在していません。戦争当時のことについて、よく知りたい。そう考えたことが今回、この派遣事業に申し込もうと思ったきっかけでした。

広島での3日間を通して、平和について考え、戦争の悲惨さや語り継ぐことの重要性を改めて実感することができました。また、特に印象に残ったのは原爆被害者の方のお話です。2日間で、二人の方から話を聞くことができました。

一人目は、広島で被爆した切明千恵子さんの伝承者である藤井皆子さんです。藤井さん自身も広島生まれで祖母と父が被爆者であり、被爆二世にあたります。(藤井さんのお話によると)切明さんは15歳の時に爆心地から1.9km地点で被爆しました。ご自身も怪我をして、同じ学校にいた多くの下級生を失いました。その下級生は私たちと同じくらいの年齢だったと聞き、私は「同じ中学生ぐらいの子どもたちがそんな目に遭うなんて…」と胸が痛みました。切明さんは、亡くなった下級生のことを考えると「生き残ってよかったと思ったことは一度もない」と話をされていたそうです。切明さんや曾祖父の経験から、戦争や原爆といった出来事は体の傷や後遺症の痛みだけではなく、戦後に心の傷も残すと考えました。

二人目は長崎での被爆者、浅川晴恵さんです。浅川さんは10歳の時に爆心地から4km地点で被爆しました。浅川さんの家には、被害にあったたくさんの人が助けを求めてやって来たそうです。以前、私は長崎の平和資料館に行ったことがあったので、今回長崎についても知ることができたのは大変貴重な機会となりました。私が浅川さんのお話で驚いたことは、世界で核保有を肯定的に捉えている国があるということです。さらに、新聞で「日本への原爆投下に関するアメリカ人の意識世論調査」を読むと、「原爆の使用が正当だった」と考えている人が多いことが分かりました。今回、平和記念資料館の焼け焦げた衣服や日常品、当時の写真などを見ることで、言葉では表現しきれないほどの衝撃を受けました。私は、実際にアメリカの人にも資料館を見て、被爆者の方から話を聞けば、正当だったという人の考えは変わるのではないかと考えました。このように、世界の人たちに原爆の被害について正しく学び、多くの人に平和について考えてほしいと思いました。

灯籠流しのメッセージには、「幸 - 平和で幸せがあふれる世界になりますように」と書きました。実際に広島に行くと、以前よりもその想いが一層強くなったと思いました。切明さんの「平和は黙っていても逃げていく」という言葉が今も心に残っています。平和な世界を実現するために今できることは、歴史について正しく学び、理解を深めていくことです。そのために、実際に現地に行ったり体験した方のお話に耳を傾けたりすることは何よりも重要だと感じました。平和の大切さを伝え続けることは、広島に行き、被爆者の方々から直接、話を聞いた私の使命であると考えています。